苫小牧の美術館の魅力を伝える

びとこま

第7号 2013年10月号

遠藤ミマンを知っていますか？

遠藤ミマンは苫小牧の文化芸術の発展に欠かせない芸術家です。小学校の先生をしながら絵を描いていました。ほかの芸術家と親しくなって、応援されたり応援したりすることもありました。安平村（今の安平町）で生まれ、生まれ育った勇払原野をテーマとした作品をたくさん描きました。苫小牧に美術館ができることを願い、運動を始めた人でもあります。2004年に90才で亡くなりました。

苫小牧市美術博物館は、遠藤ミマンが生まれて100年になることを記念して、「遠藤ミマン生誕100年記念展～勇払原野を愛して～」（2013年9月7日～29日）を開催しました。苫小牧に美術館ができることを願っていた遠藤ミマンが生まれてちょうど100年というときに、苫小牧市美術博物館がオープンするなんて、運命的ですね！今回のびとこまは、この運命的な展覧会の特集です！

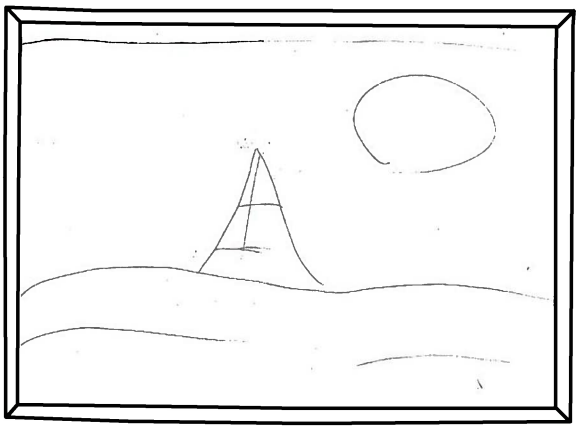
「遠藤ミマン生誕100年記念展～勇払原野を愛して～」で、私がいいなぁと思った作品は『ライン河畔の古城』という作品です。なぜこの作品なのかというと、他の作品は油絵なのに、この作品は水彩絵の具で描かれているということと、他の作品はのどかな自然という感じなのに、この作品は外国みたいな感じで、にぎやかな感じでいいなぁと思ったからです。色があざやかで、きれいだなぁと思ったのも理由のひとつです。（菊池りの）

遠藤ミマンが水彩の絵の具と油彩の絵の具をどのように使っているかということに僕は興味を持った。水彩の絵は、さわやかな色味が出て、油彩の絵は深い色味が出ていると思う。僕は油彩の絵より水彩の絵のほうが好きだ。（荒井楓）

三村学芸員の解説を聞くびとこま記者たち

つづきは次のページ!!

遠藤ミマン
生誕100年記念展
勇払原野を愛して



『丘の風景』
イラスト：佐々木健人

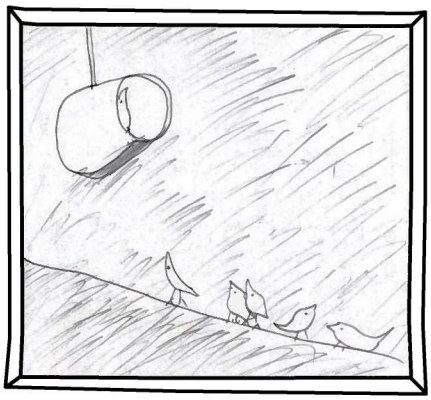
僕は『丘の風景』という作品が好きだった。何となく好きだった。
（佐々木健人）

『丘の風景』という作品の、とくに山の部分が細かい色分けになっていたり、描かれているものが少ないので、全体的に自立っているところが気に入った。
（荒井楓）

ぼくが気に入った作品は『開墾地―馬と遊び狐と遊び花と遊び―』という作品です。気に入った理由は夕暮れの日に遠藤ミマンさんらしき人と馬がいっしょに遊んでいるところがあり、それを見ると遠藤ミマンさんはとても馬が好きだったんだな、というのがわかるからです。また花なども描かれていて、とても自然も好きだったんだなと思いました。ぼくはこの絵を見ていたら、自分も楽しい感じになるなど思いました。（的場翔）

『ライラック』
イラスト：熊谷理菜

『向日葵』
イラスト：山本舞羽



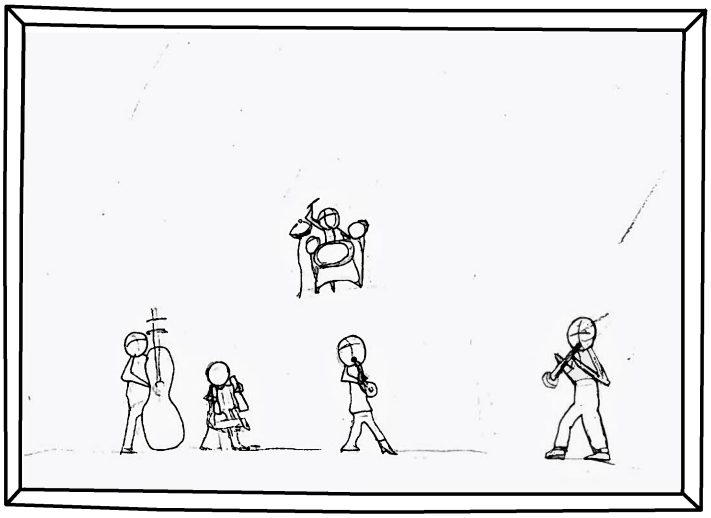
『小鳥』
イラスト：本村朱里

気に入ったのは、『赤い帽子』です。本物の帽子は、すごく洒落た帽子でした。なんかすごかったです。（千葉心美）

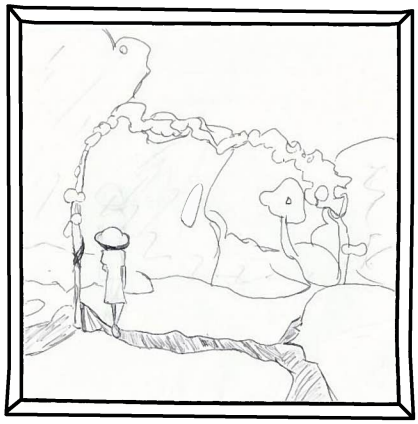
私は遠藤ミマンさんの作品の中で、『向日葵』という作品が気に入った。この作品は花びらの描かれている部分がとてもリアルに描かれていて、向日葵のはかなさを感じることが出来た一枚だった。遠藤さんは病気にかかり、立てなくなった時に庭をふと見ると、枯れた向日葵が立っていて、それを見て「自分も頑張らなくては」と思ったそうだ。そして、病気が治った時に向日葵に対する感謝の気持ちでこの絵を描いたそうだ。そしてこの絵を描いた１９５１年にもう一枚、コラージュというやり方で、同じ題の絵を描いていた。（山本舞羽）

『赤い帽子』
イラスト：千葉心美

『小鳥の絵』は、鳴き声が聞こえてきそうな、かごの中に入った鳥がかわいい絵です。（本村朱里）



『ジャズ』
イラスト：望月王翔



『つるバラの門』
イラスト：浜明日美

『ジャズ』が気に入った。『ジャズ』というタイトルの絵は２点あって、気に入った片方をイメージして描いたら、もう一方のイメージも重なって、合作みたいになった。（望月王翔）

中庭にある縷伝-rui-という作品

苫小牧市美術博物館は、中庭スペースに作品の展示を始めました。おもに苫小牧を中心に活躍する芸術家の立体作品を展示します。

第一回目の展示は、苫小牧市出身の若手芸術家田村純也さんの石の彫刻作品『縷伝-rui-』です。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

六方石という中国の石を使って作られています。この石は山から取れるそうです。この石は細長い石です。この作品は木の板から16本の石が出ていて、その石、一本一本の下にくぼみがあり、それは下から成長することを表しているそうです。板から石が生えてきている感じのとても面白い作品だと思いました。（的場翔）

私は最初、田村さんの作品は変な物に見えてました。私は「えー、なにこれ、よくわかんないな。」と思っていたけど、でも説明を聞いたら、この作品は『るい』という作品で、六方石という石でできていて、展示されている形のまま山の中に埋まっているそうで、形はそのままで、自然が生み出した形だそうです。作品には黒い部分があり、そこは磨いたそうです。この石は中国の石で、一つ一つが重いそうです。この石は、すき間なく山に埋まっていて、この形が山の形になっているそうです。（荒井聖）

この作品は、作者の田村純也さんによると、全部、石でできていて、作品にあるくぼみは、石にもともとあったくぼみを磨いただけだそうです。石は中国で取れる石で、一番大きいものは150 センチメートル、100 キログラム、小さいので30 センチメートル、10 キログラムぐらいだそうです。運ぶ時、大変だったそうです。作品は16本の石でできていて、16本で表しているのは万位だそうです。

作品の台は木の板で、この板にも並べ方があり、真ん中の板が正方形で、その板を中心に長方形の板がぐるりと渦を巻くように並んでいました。この作品は、苫小牧市美術博物館のために作ったそうです。作るのに一ケ月かかったそうです。

この作品は7月27日から9月10日まで展示されました。（伊藤なつみ、菊池りの）

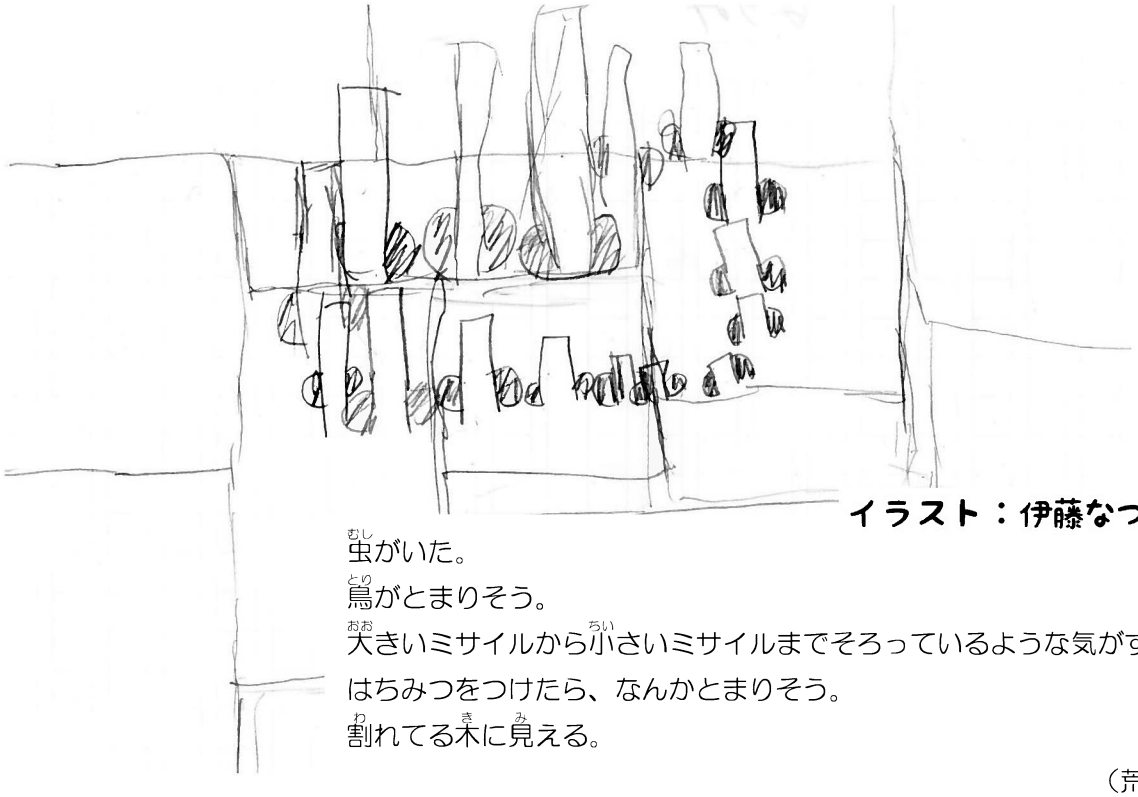
イラスト：本村朱里

田村純也

苫小牧市出身。石の彫刻家。

いま、苫小牧でもっとも注目を集める若手彫刻家のひとり。

石や金属、木材などいろいろなもので、彫刻、あかり、庭などを作っている。石を磨いたときのツヤツヤした感じやピカピカした感じ、割ったときのザラザラした感じやゴツゴツした感じなどをいかして作品にしている。



イラスト：伊藤なつみ

虫がいた。

鳥がとまりそう。

大きいミサイルから小さいミサイルまでそろっているような気がする。

はちみつをつけたら、なんかとまりそう。

割れてる木に見える。

（荒井聖）

10月と11月の展示は？

苫小牧港開港50周年記念企画展
夢を形に
～砂浜と原野にいどんだ時代～

みなさんは、今年の10月12日（土）から11月24日（日）まで苫小牧市美術博物館で『苫小牧港開港50周年記念展 夢を形に～砂浜と原野にいどんだ時代～』という展示が行われるのを知っていますか？ぜひ行ってみてください。いろいろな苫小牧港の歴史があるので、必ず行って、見てください。魅力的な展示がいっぱいあります。苫小牧に港が出来るまでをぜひご覧ください。料金は一般が300円、大学・高校生が200円、小中学生が無料です。（佐々木健人、本村朱里）

昔、砂浜に港をつくることはできないと思われていました。

苫小牧の海岸も砂浜で、人々が港をつくりたいと思っても、技術的な問題やお金の問題で難しいと思われていました。しかし!! 多くの人や会社の強い願いと努力によって、いまから50年前、日本ではじめて内陸堀込式という方法で苫小牧港が完成しました。

次の展示は、そんな苫小牧港ができるまでを紹介するものです。貴重な写真や地図で歴史をくわしく紹介するのに合わせて、苫小牧の港をテーマにした絵画作品も展示します。港の歴史フィルムの上映会や苫小牧港の今と昔を知る歴史見学会、展示解説会なども予定しています。

- **港の歴史フィルム上映会 ～人造港 苫小牧～** 10/12（土）と11/23（土）14時から ※予約はいりません
- **歴史見学会 苫小牧港の今と昔** 10/26（土）13時から ※10/5（土）から電話で予約受付
- **展示解説会** 10/20（日）と11/17（日）午前は10時、午後は14時から ※予約はいりません

3ヶ月ほど、ふるさと福岡に帰ることになりました。びとこま記者たちの取材した記事やイラストを福岡市内の実家で編集しています。苫小牧は、もう寒いかもしれませんね。福岡も、やっと秋らしくなってきましたが、まだ蒸し暑くて半そでで過ごす日もあります。『蚤の市』というのが流行っているみたいで、週末になるとあちこちの公園やデパートの催し物会場に、アンティークの家具だとか、外国のボタンやレースだとか、パンや焼き菓子やジャムだとかを売る小さなかわいいテントが並んで、ものすごくにぎわっています。何に使うかわからないもの…たとえばタンスの引き出しだけ…を売るテントとか、絵本作家さんが自分の絵を売っているテントなんかもあって、お買い物をしなくて見るだけでも楽しい気分です。 編集係 おごちん

製作 ： 美術館広報部
取材 ： 荒井楓、荒井聖、伊藤なつみ、菊池りの、熊谷理菜
佐々木健人、千葉心美、浜明日美、本村朱里、的場翔
望月王翔、山本舞羽
編集 ： 樽前arty＋、小河 けい
発行 ： 苫小牧市美術博物館

（お問合せ）
〒053-0011 苫小牧市末広町3丁目9番7号
tel 0144(35)2550 fax 0144(34)0408
HP www.city.tomakomai.hokkaido.jp/hakubutukan/
e-mail hakubutukan@city.tomakomai.hokkaido.jp

☆協力のお願い☆

「美術館広報部」の記者であることを証明するカードを提示された方は、取材へのご協力をお願いします。疑問点や確認等が必要となる場合、博物館までご連絡をお願いします。

感想などメッセージをお待ちしてます♪